第９課　パウロの牧会的訴え

【暗唱聖句】

「わたしもあなたがたのようになったのですから、あなたがたもわたしのようになってください。兄弟たち、お願いします。あなたがたは、わたしに何一つ不当な仕打ちをしませんでした」ガラテヤ4:12

【今週のテーマ】

パウロは厳しい語調で手紙を書いていますが、それは迷える群れに対する良き牧者として、彼が愛するものたちを助けようとしてのことでした。

【日曜日・パウロの心】

「あなたがたのために苦労したのは、無駄になったのではなかったかと、あなたがたのことが心配です」ガラテヤ4:11

わたしたちも神様に導いた人たちが、信仰から離れたり、間違った信仰にそれていくのを見たりすれば、本当に心配になることでしょう。多くの教会で長欠者のための働きを続けているのも心配する気持ちから来ています。また、小さい時には教会に通っていた我が子が今は教会に来ていないというケースでは、より一層心配になります。さて、このような状況の中でパウロが示したのは次のようなことでした。

「わたしもあなたがたのようになったのですから、あなたがたもわたしのようになってください。兄弟たち、お願いします…」ガラテヤ4:12

自分を模範にしてほしいとパウロは言っています。自分の生き様で本当の信仰を見せるしかないと思ったわけです。私たちはどうでしょうか。信仰の模範となる責任が導き手にはあるということですが、なかなかこう言えない自分があるとき、自分たちが関わった一人ひとりによって、私たち自身も信仰のあり方がもう一度学ばされます。

パウロは「兄弟たち、お願いします」と言っていますが、このギリシャ語は非常に強い嘆願の言葉であり、絶望的なニュアンスすら込められています。それくらい必死ということです。ガラテヤ4:19，20ではさらにこう続けます。

「わたしの子供たち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、わたしは、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます。できることなら、わたしは今あなたがたのもとに居合わせ、語調を変えて話したい。あなたがたのことで途方に暮れているからです」ガラテヤ4:19、20

伝道者なら誰でも経験することですが、一人の人がキリストを信じ、キリストがそのうちに形作られるようにと導くことは大変なことです。それをもう一度繰り返さなければならないのかと考えると、途方に暮れるとパウロは言うほどでした。しかし、パウロは期待しているクリスチャンのレベルというのは、いかに高いことかと思います。ガラテヤの教会の人々は決して教会に来なくなったとか、信仰から離れたとかいうわけではないのです。ただ、キリストが内に形づくられていないことを心配しているのです。本当のキリスト者としてのレベルまで引き上げたいと思っているのです。もし、パウロはいまこの時代に来ていたとしたら、現代の教会を見て何ということでしょう。

【月曜日・なることへの挑戦】

「わたしがキリストに倣う者であるように、あなたがたもこのわたしに倣う者となりなさい」第一コリ11:1

「兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい」フィリピ3:17

「あなたがた自身、わたしたちにどのように倣えばよいか、よく知っています。わたしたちは、そちらにいたとき、怠惰な生活をしませんでした。また、だれからもパンをただでもらって食べたりはしませんでした。むしろ、だれにも負担をかけまいと、夜昼大変苦労して、働き続けたのです。援助を受ける権利がわたしたちになかったからではなく、あなたがたがわたしたちに倣うように、身をもって模範を示すためでした」第二テサ3:7～9

「パウロは言った。「短い時間であろうと長い時間であろうと、王ばかりでなく、今日この話を聞いてくださるすべての方が、私のようになってくださることを神に祈ります。このように鎖につながれることは別ですが」使徒26:29

ガラテヤ4:12以外にも、パウロは繰り返し自分のようになってほしいと言っています。これはパウロの行動を真似するということではありません。一人ひとり与えられたタラントや使命、また置かされた状況が異なりますから、同じことはできません。しかし、自分のようになることはできるとパウロは確信しています。それが意味することは、キリストを土台とした信仰に生きることです。信仰による喜び、自由、愛などの素晴らしい世界を自分のように味わい知ってほしかったのです。

【火曜日・私はあなたがたのようになった】

「わたしもあなたがたのようになったのですから、あなたがたもわたしのようになってください。兄弟たち、お願いします…」ガラテヤ4:12

パウロは「わたしもあなたがたのようになったのですから」と言っています。この意味することは、第一コリント9:19～23にあるように、パウロは一人でも多くの人を救うために、自分の身分を捨て、特権を捨て、その人と同じ立場になることに努め、奴隷には奴隷のように、ユダヤ人に対してはユダヤ人のように、異邦人には異邦人のようになりました。同様に、ガラテヤの人たちに対しても、ユダヤ人としての自分を捨て、ガラテヤ人（異邦人）のようになって接したのです。

これは相手を理解するためでした。相手の立場を理解した上で福音を語らないと、福音を伝えることが難しいからです。上から目線では正しいことであっても、なかなか伝えることができません。これを一般に文脈化といいます。しかし、文脈化にも限界はあります。そのためキリストの福音の内容を妥協しない範囲において文脈化していくことが大切です。

【水曜日・当時と現在】

「知ってのとおり、この前わたしは、体が弱くなったことがきっかけで、あなたがたに福音を告げ知らせました」ガラテヤ4:13

パウロがガラテヤで福音を厳しい調子で語ったのには、きっかけがありました。それは「体が弱くなったこと」とパウロは言っています。体が弱くなったとはどういうことなのか詳しいことはわかりません。「あなたがたは、できることなら、自分の目をえぐり出してもわたしに与えようとしたのです」（ガラテヤ4:15）と以前はそのようなことがあったことから、一般に目の調子が悪かったという説が有力なようですが、はっきり断定はできません。ただわかることは、移動してガラテヤの町を離れることができない状態だったということです。それは普通大変困った状況なのですが、しかし、パウロはそのおかげで長くガラテヤの教会にとどまることができ、結果的に福音を告げ知らせることができたと語っています。このようにたとえ病気にかかったとしても、それを悪いことのようにとらえず、それがきっかけとなって神様の素晴らしい働きを行うことができたと捉えるところに信仰があります。

【木曜日・真理を語る】

「すると、わたしは、真理を語ったために、あなたがたの敵となったのですか」ガラテヤ4:16

かつて、ガラテヤの教会の人たちとパウロは大変良好な関係にありました。「わたしを神の使いであるかのように、また、キリスト・イエスででもあるかのように、受け入れてくれました」（ガラテヤ3:14）とある通りです。しかし、いま福音の真理を語ったとき、その関係が壊れてしまい、まるで敵となってしまったのでしょうかとパウロは言います。決してそのようなことはなかったことと思いますが、真理を語るというのは、とてもストレートで、相手に逃げ場を与えず、厳しいものとなるときがあります。しかし、パウロは福音の真理を語るのは、ガラテヤの人たちを愛しているがゆえであり、そのことはガラテヤの人たちも十分理解していました。

それに対して、本当の敵が福音の真理から人々の心をそらそうと熱心に語っているのは、愛や善意からではなく、身勝手な動機からでした。それはイエス様ではなく、自分たちに熱心にならせようとして、ガラテヤの人々を引き離したいためでした。

「あの者たちがあなたがたに対して熱心になるのは、善意からではありません。かえって、自分たちに対して熱心にならせようとして、あなたがたを引き離したいのです」ガラテヤ4:17

熱心さというのは、ある人たちを引き付ける力があります。熱心であること自体は素晴らしいことですが、間違った方向への熱心さは、真理を見えなくさせます。